

配筋標準図

1. 1 基礎梁主筋の継手、定着及び余長

- (1) 一般事項
- (ア) 梁筋は、原則として、柱に引き通すものとし、引き通すことができない場合は、柱内に定着する。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図1.1による。
- (イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、図1.1による。

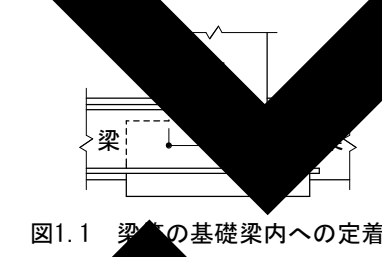


図1.1 梁筋の基礎梁内への定着

(2) 基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長

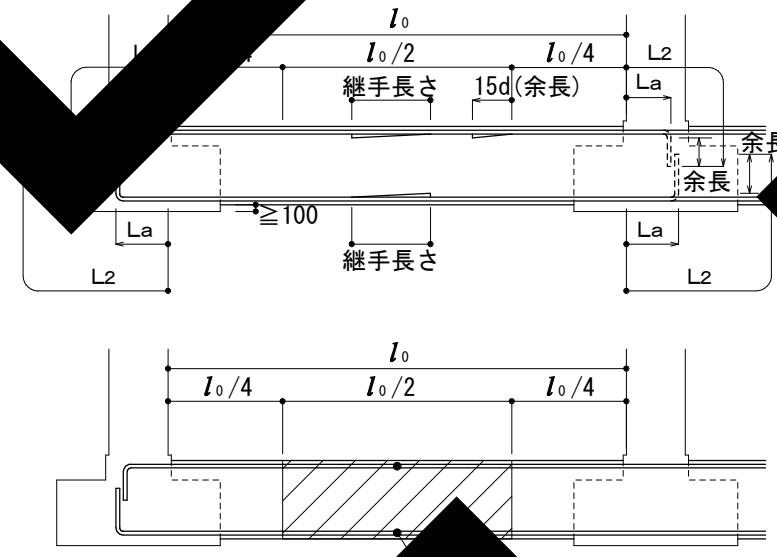


図1.2 主筋の継手、定着及び余長

- 1. 図示のない事項は、3.1による。
- 2. 印は、継手及び余長位置を示す。
- 3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
- 4. L_a の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

(3) 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長

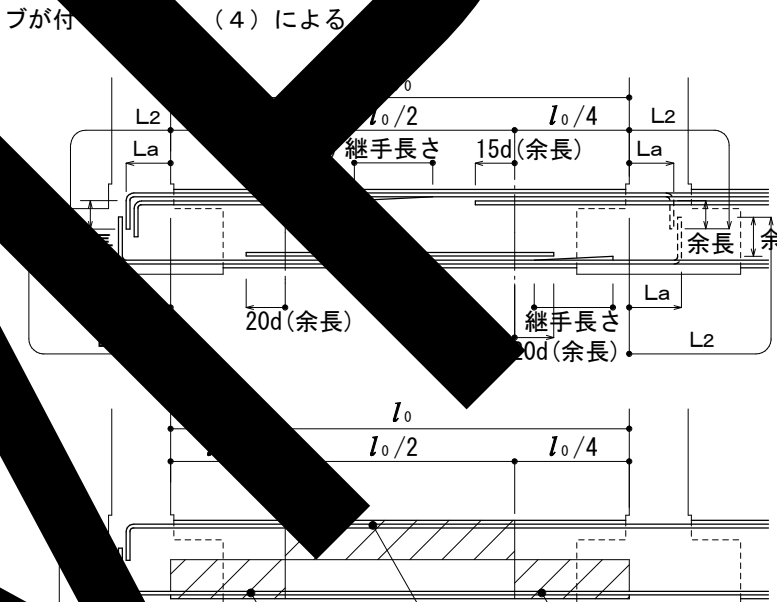


図1.3 主筋の継手、定着及び余長(その2)

- 1. 図示のない事項は、3.1による。
- 2. 印は、継手及び余長位置を示す。
- 3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
- 4. L_a の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

(4) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長(耐圧スラブがつく場合を含む)

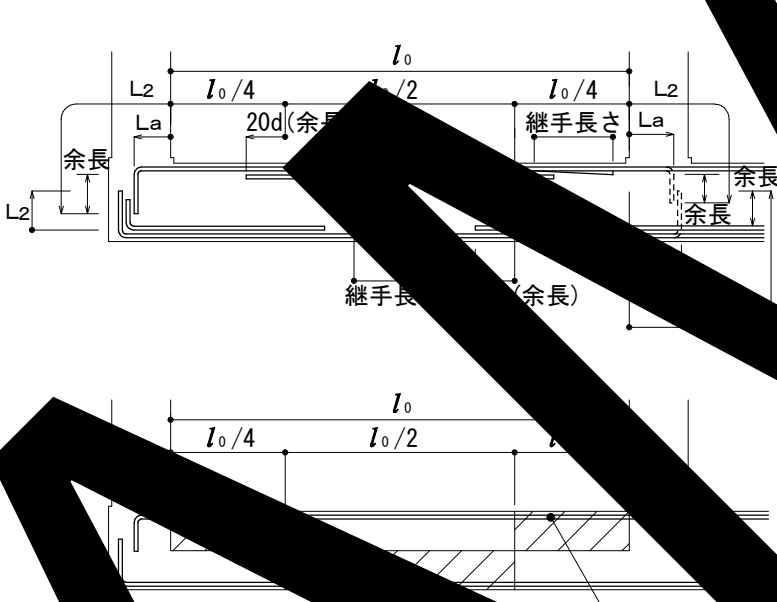


図1.4 主筋の継手、定着及び余長(その3)

- 1. 図示のない事項は、3.1による。
- 2. 印は、継手及び余長位置を示す。
- 3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
- 4. L_a の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

1. 2 基礎梁のあばら筋

あばら筋組立の形及びフックの位置は、3.2による。ただし、フックが付く場合で、かつ、 $L_2 \geq 1.5m$ 以上の場合は、図1.5によることができる。

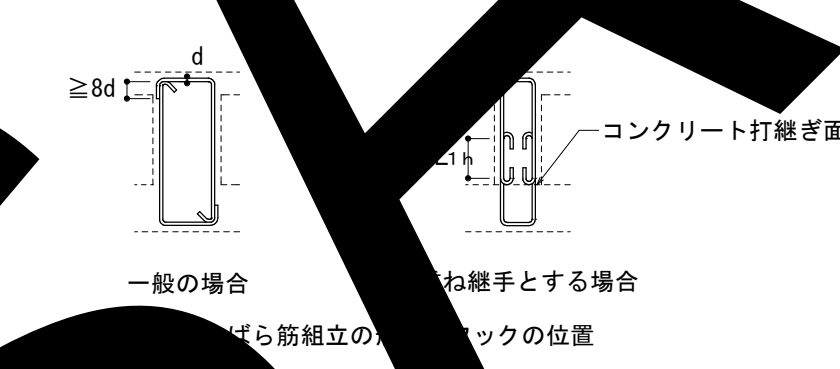


図1.5 あばら筋組立の形及びフックの位置

2. 柱主筋の継手、定着及び余長

(1) 柱主筋の継手及び定着の一般事項

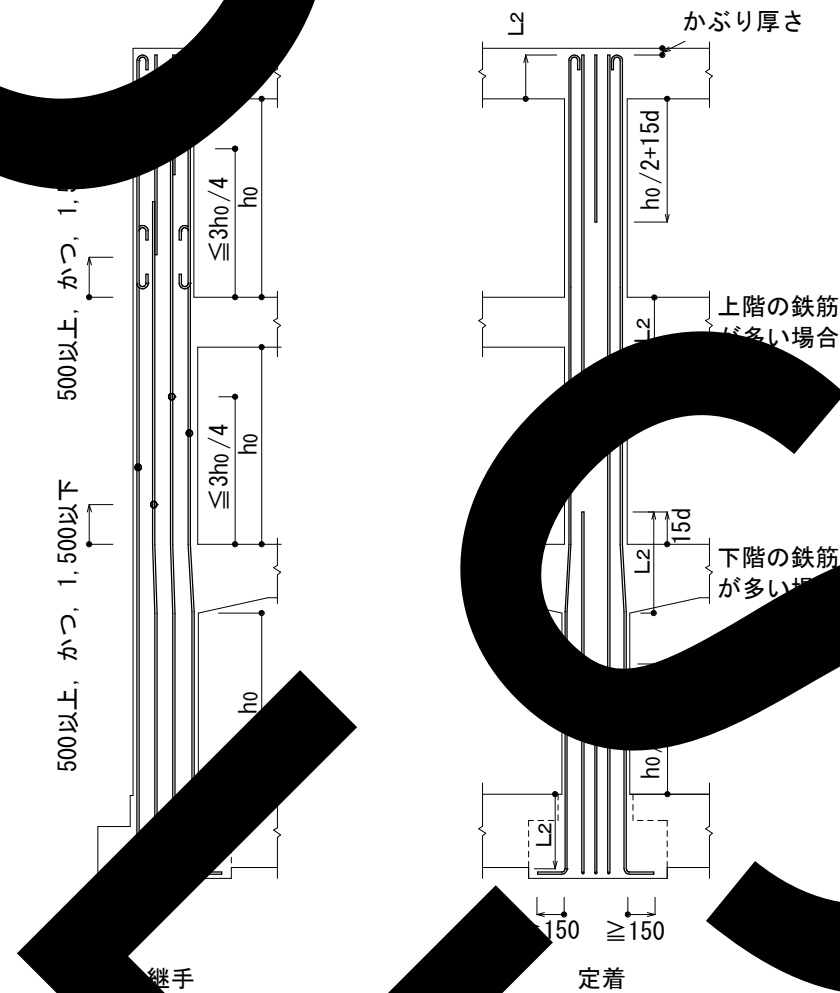


図2.1 柱主筋の継手、定着及び余長

- 1. 柱の四隅にある主筋の継手の場合及び、柱頭にある場合には、フックを付ける。
- 2. 隅り合う継手の位置は、標準仕様書(5.3.2(2)(イ))による。
- 3. 柱頭定着長さ L_2 が確保できない場合は、計算等により必要長さの確保を行うものとする。
- 4. 柱頭柱主筋について、梁上端主筋の打ち出し厚さを考慮し、適切なかぶり厚さとする。

(b) 柱周囲の打増しは、図2.2による。

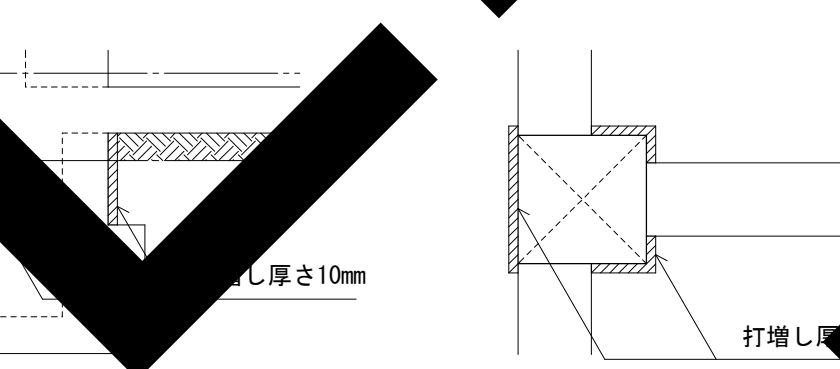
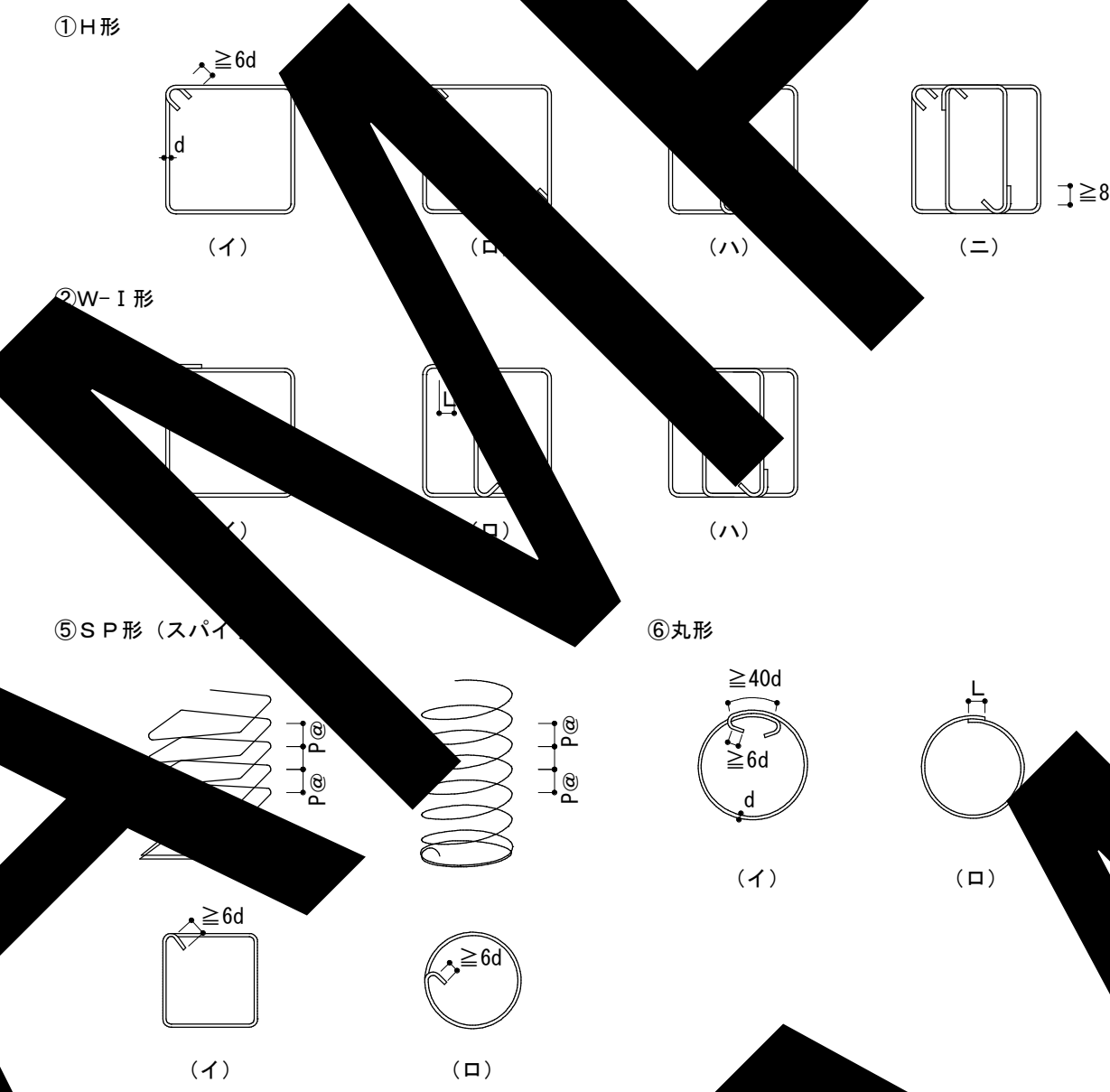


図2.2 柱打増し部

2. 2 帯筋組立の形及び割付け



- 1. H形を標準とする。
- 2. フック及び継手の位置は、交互とする。
- 3. 溶接は、鉄筋の組立前に行う。
- 4. 溶接する場合の溶接長さ L は、両面重ねアーク溶接(フレア溶接)の場合は、片面重ね(フレア溶接)の場合は $10d$ 以上とする。
- 5. SP形において、柱頭及び柱筋の端部は、1.5巻以上の添巻を行う。
- 6. H形の135° 曲げフックが困難な場合は、丸形とする。

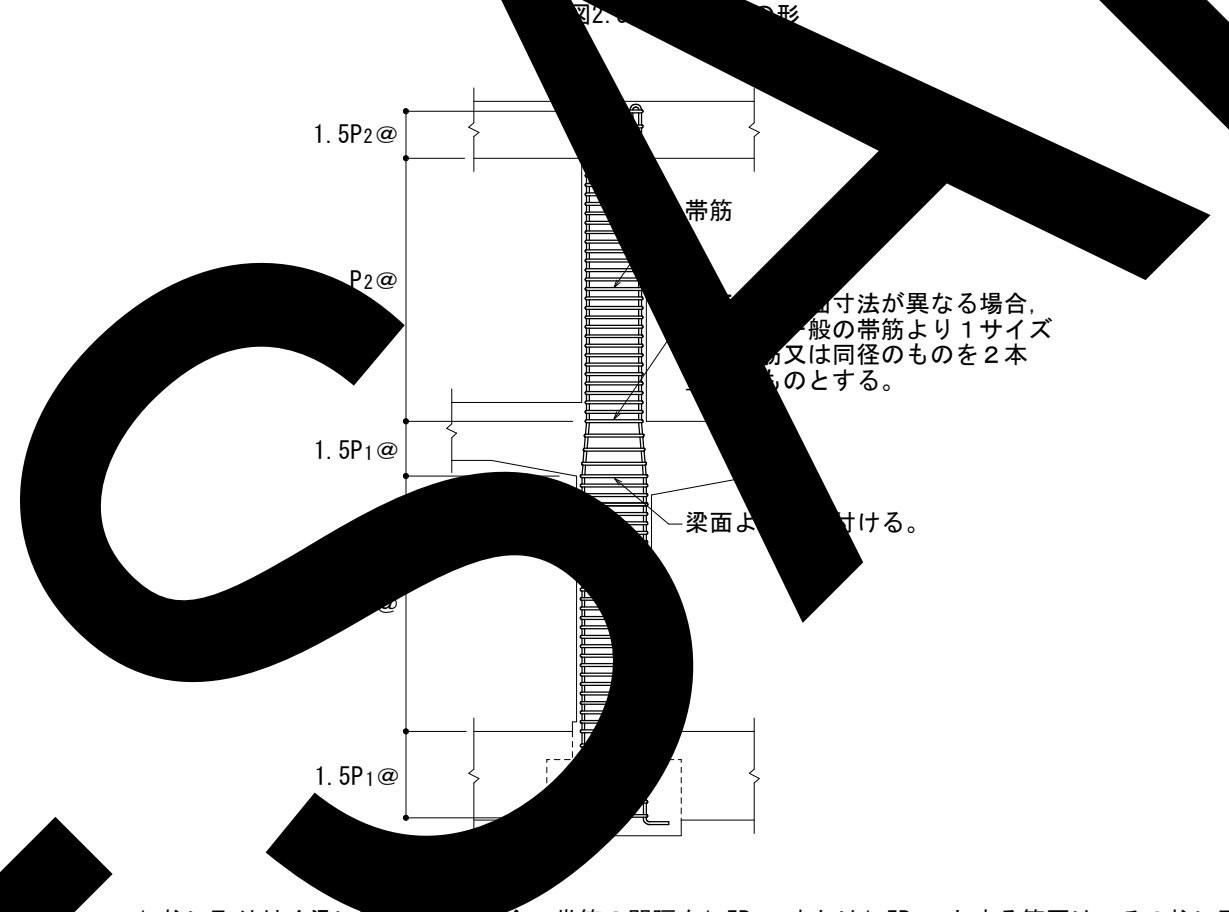


図2.4 帯筋の割付け

- 1. 柱に取り付く梁に取付く場合、帯筋の間隔を $1.5P_1@$ または $1.5P_2@$ とする範囲は、その柱に取り付くすべての梁を考慮して適用する。なお、 $P_1@$ 、 $P_2@$ は、特記された帯筋の間隔を示す。

3. 1 大梁主筋の継手、定着及び余長

- (1) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
- (ア) 梁主筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、(イ)により柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図3.1による。

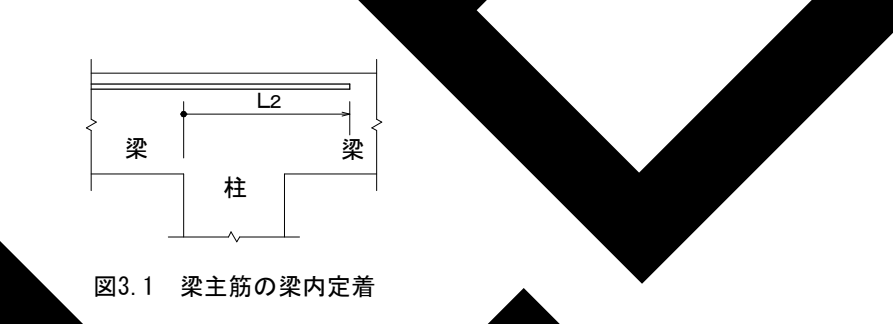


図3.1 大梁主筋の梁内定着

- (イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、図3.1による。
- (ロ) 梁筋を柱内に定着する場合は、標準仕様書(5.3.2(2)(イ))による。
- (ハ) 上端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ニ) 下端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ホ) 上端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ヘ) 下端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ウ) 段違い梁は、図3.2による。

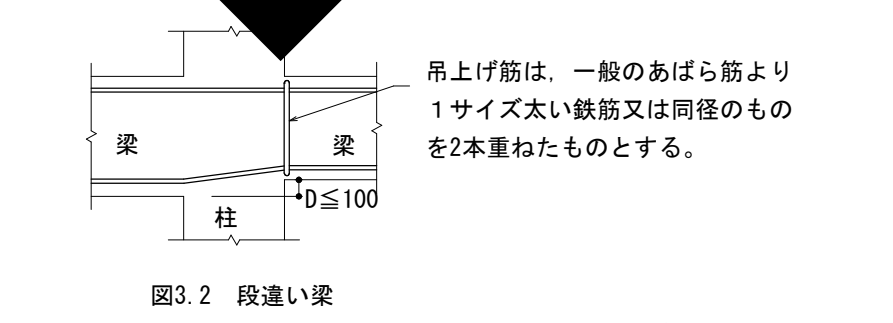


図3.2 段違い梁

(エ) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長

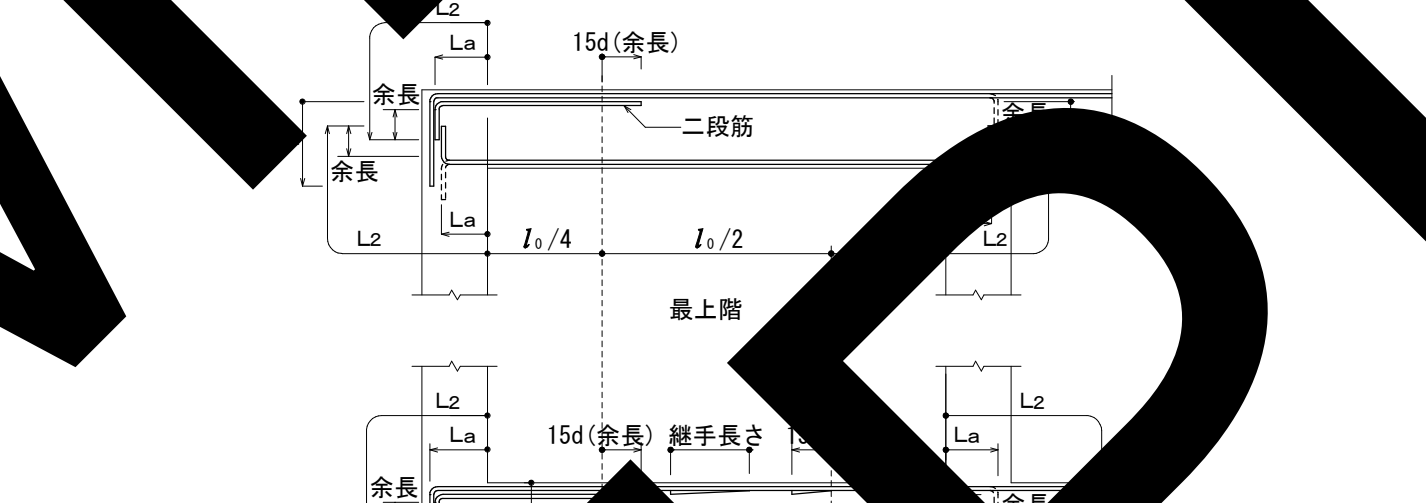


図3.3 大梁の重ね継手、定着及び余長



図3.4 ハンチのある大梁の継手、定着及び余長

- (1) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
- (ア) 梁主筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、(イ)により柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図3.1による。
- (イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、図3.1による。
- (ロ) 梁筋を柱内に定着する場合は、標準仕様書(5.3.2(2)(イ))による。
- (ハ) 上端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ニ) 下端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ホ) 上端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ヘ) 下端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ウ) 段違い梁は、図3.2による。
- (エ) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長
- (イ) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長
- (ロ) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長

図3.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

図3.4 ハンチのある大梁の継手、定着及び余長

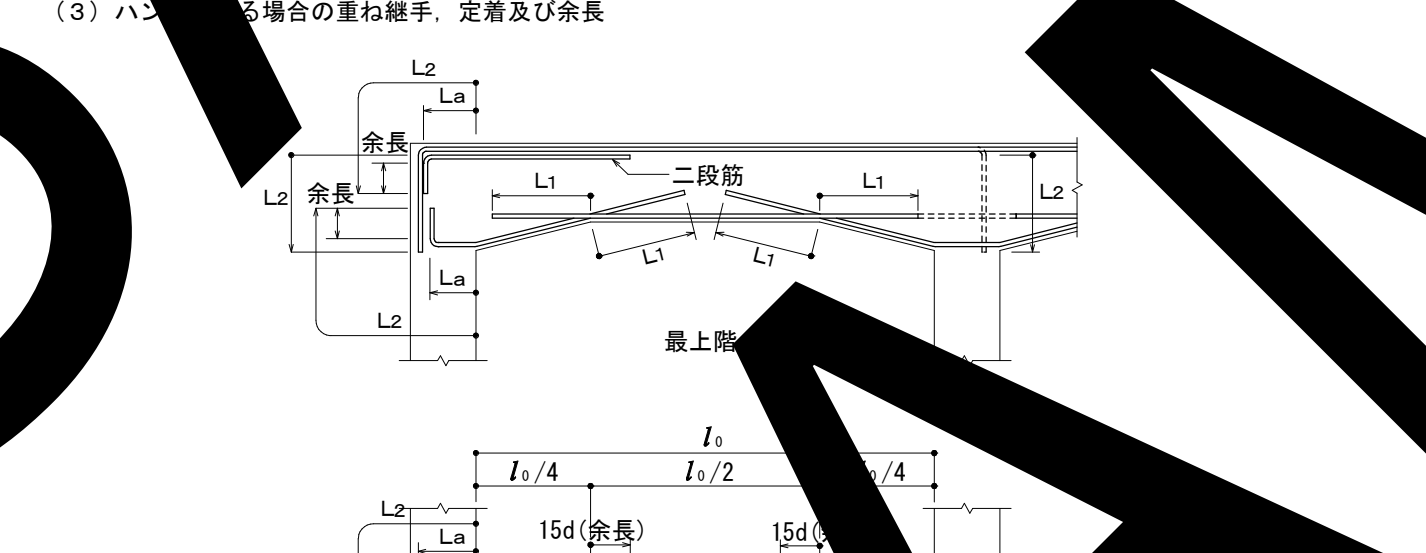


図3.4 ハンチのある大梁の継手、定着及び余長

- (1) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
- (ア) 梁主筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、(イ)により柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図3.1による。
- (イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、図3.1による。
- (ロ) 梁筋を柱内に定着する場合は、標準仕様書(5.3.2(2)(イ))による。
- (ハ) 上端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ニ) 下端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ホ) 上端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ヘ) 下端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ウ) 段違い梁は、図3.2による。
- (エ) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長
- (イ) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長
- (ロ) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長

図3.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

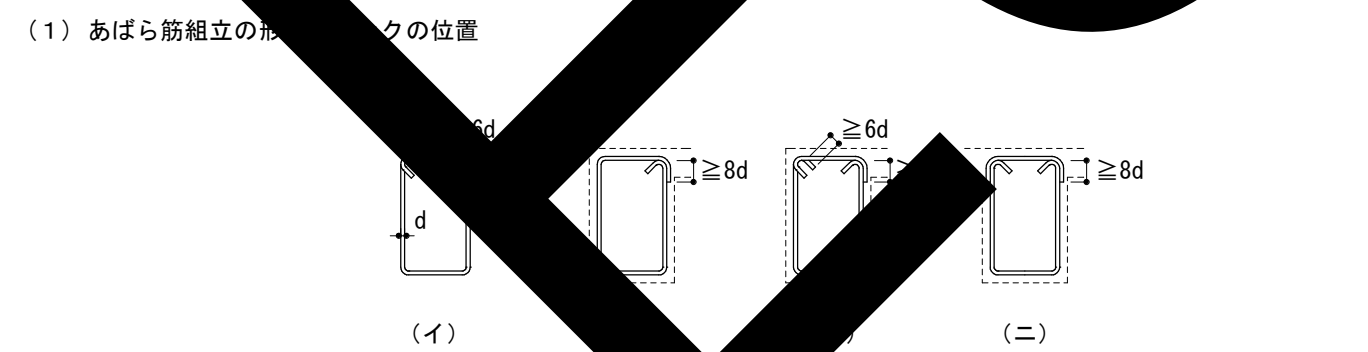
図3.4 ハンチのある大梁の継手、定着及び余長

- (1) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
- (ア) 梁主筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、(イ)により柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図3.1による。
- (イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、図3.1による。
- (ロ) 梁筋を柱内に定着する場合は、標準仕様書(5.3.2(2)(イ))による。
- (ハ) 上端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ニ) 下端筋(一般層)は、原則として曲げ降ろす。
- (ホ) 上端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ヘ) 下端筋(ハンチ)は、原則として曲げ降ろす。
- (ウ) 段違い梁は、図3.2による。
- (エ) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長
- (イ) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長
- (ロ) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長

図3.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

図3.4 ハンチのある大梁の継手、定着及び余長

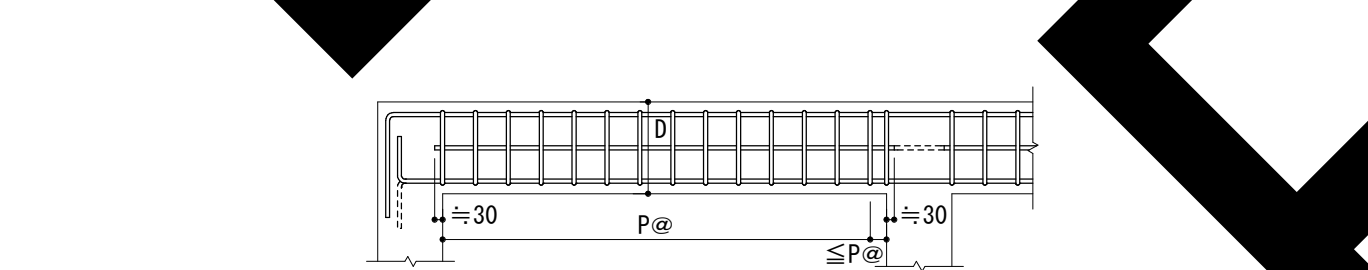
3.2 あばら筋（小梁・主筋、基礎梁含む）の組立て形及び割付け



1. (イ)形を標準とする。ただし、L形梁の場合は、(ハ)、T形梁の場合は、(ロ)～(ニ)とすることができる。
 (イ)の位置は、(イ)の場合は交互とし、(ロ)の場合は、L形ではスラブの付く側、T形では交互とする。
 (ハ)の場合は床版の付く側を90°とする。

図3.5 あばら筋の組立て形

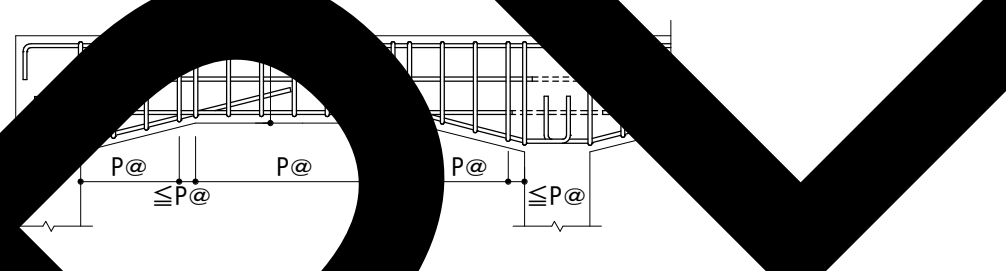
(2) あばら筋の割付け



- あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
- 図中P@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.6 あばら筋の割付け (1)

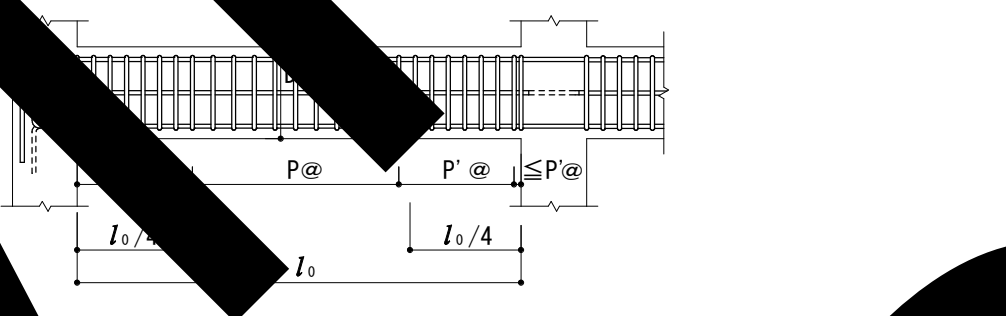
(イ) 間隔が一様でハンチがある場合



あばら筋は、柱面からハンチに切り替わる位置から割り付ける。
 図中P@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.7 あばら筋の割付け (その2)

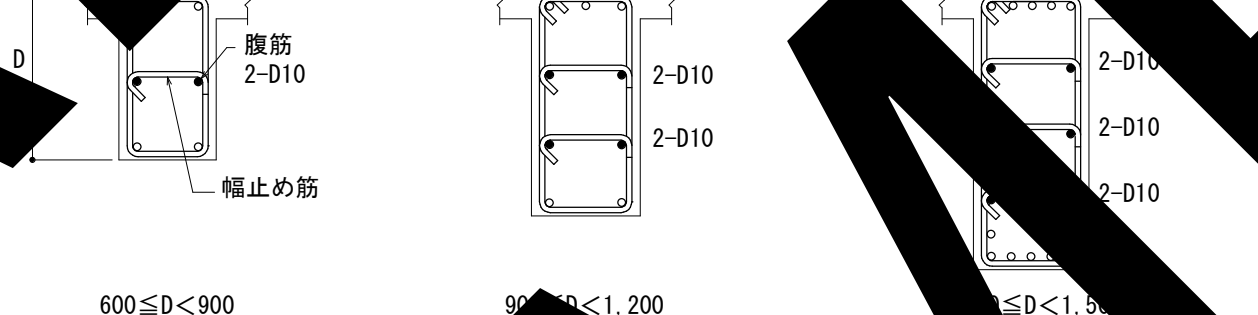
(ウ) 間隔が異なる場合



あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
 図中P@、P'@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.8 あばら筋の割付け (その3)

(3) 腹筋（幅止め筋）



- 腹筋に継手は、150mm程度とする。
- 幅止め筋及び幅止め筋の継手は、1000mm程度とする。

図3.9 腹筋（幅止め筋）

3.4 小梁主筋の継手、定着及び余長

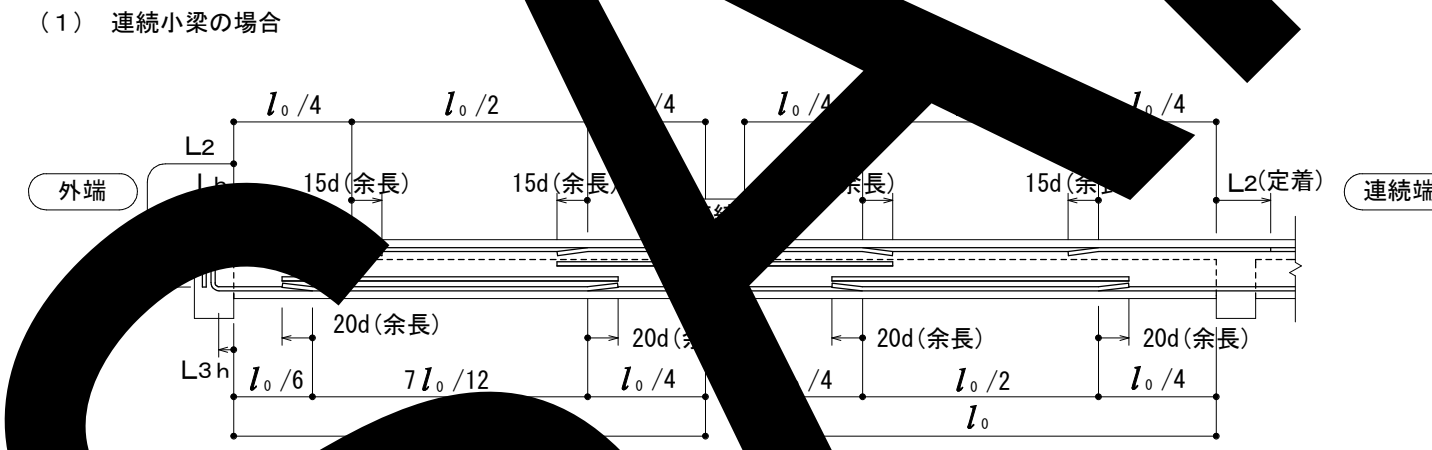


図3.10 小梁主筋の継手、定着及び余長(その1)

(2) 片持梁の場合

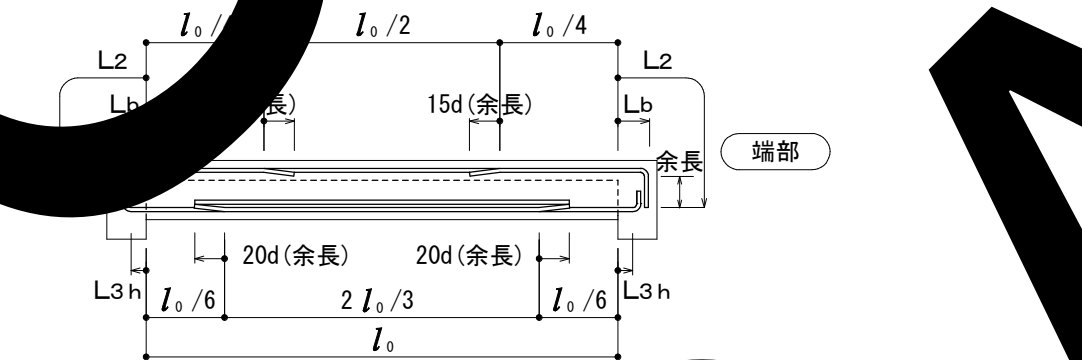


図3.11 小梁主筋の継手、定着及び余長(その2)

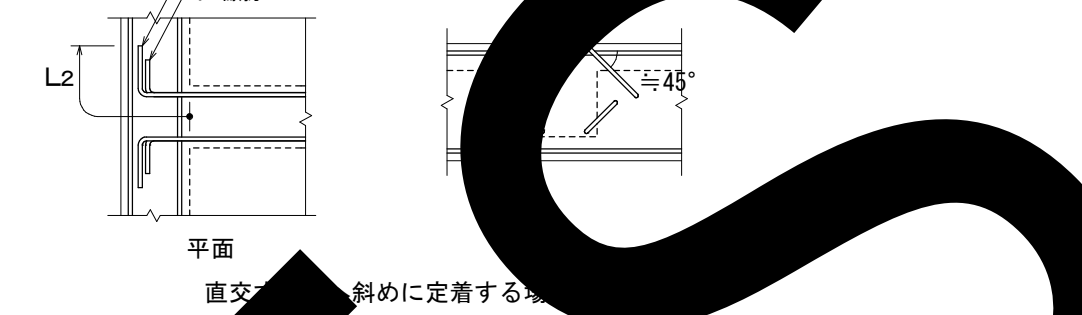


図3.12 片持梁主筋の定着及び余長

3.5 片持梁主筋の継手、定着及び余長

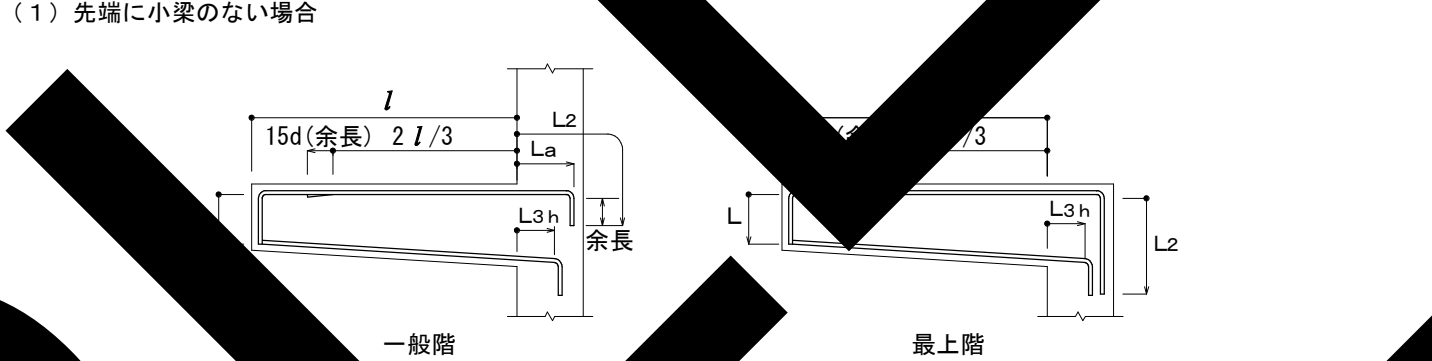


図3.13 片持梁主筋の定着及び余長

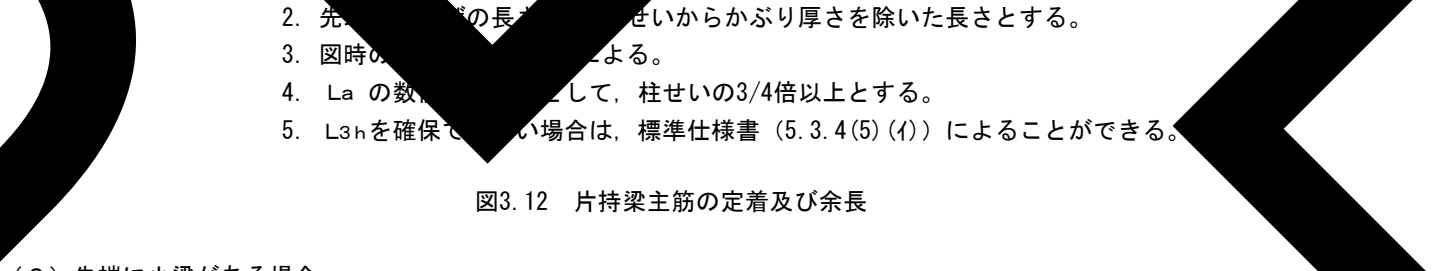


図3.14 片持梁主筋の定着及び余長

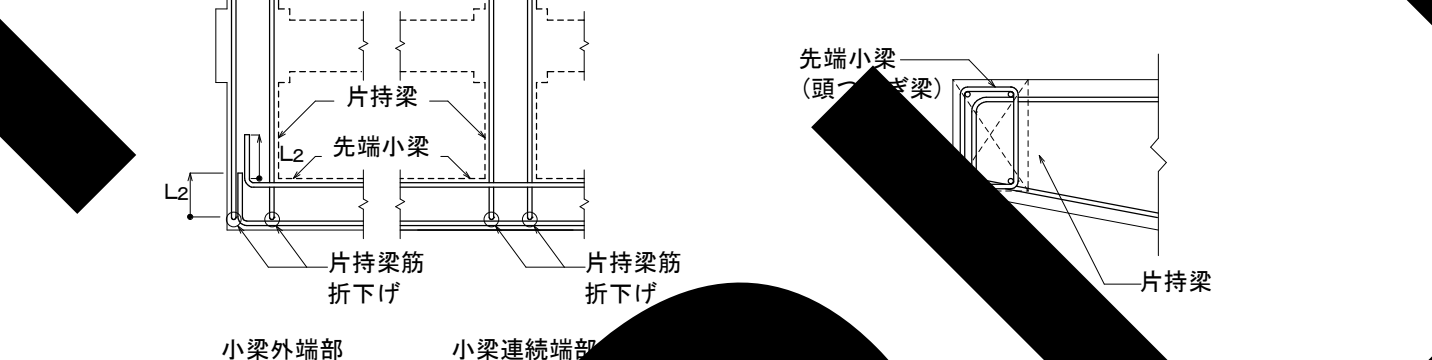


図3.15 片持梁主筋の定着及び余長

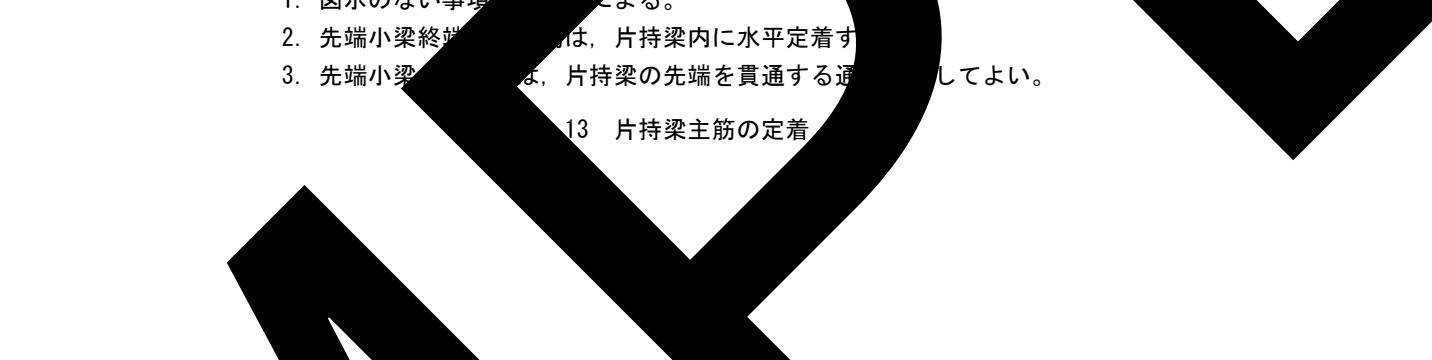


図3.16 片持梁主筋の定着及び余長

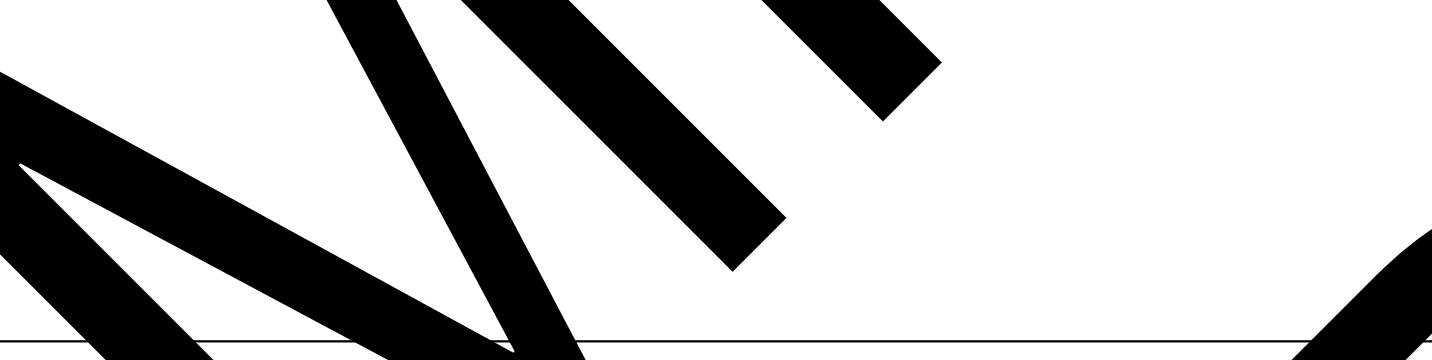


図3.17 片持梁主筋の定着及び余長

4.1 壁の配筋

(1) 壁の配筋は表4.1による。

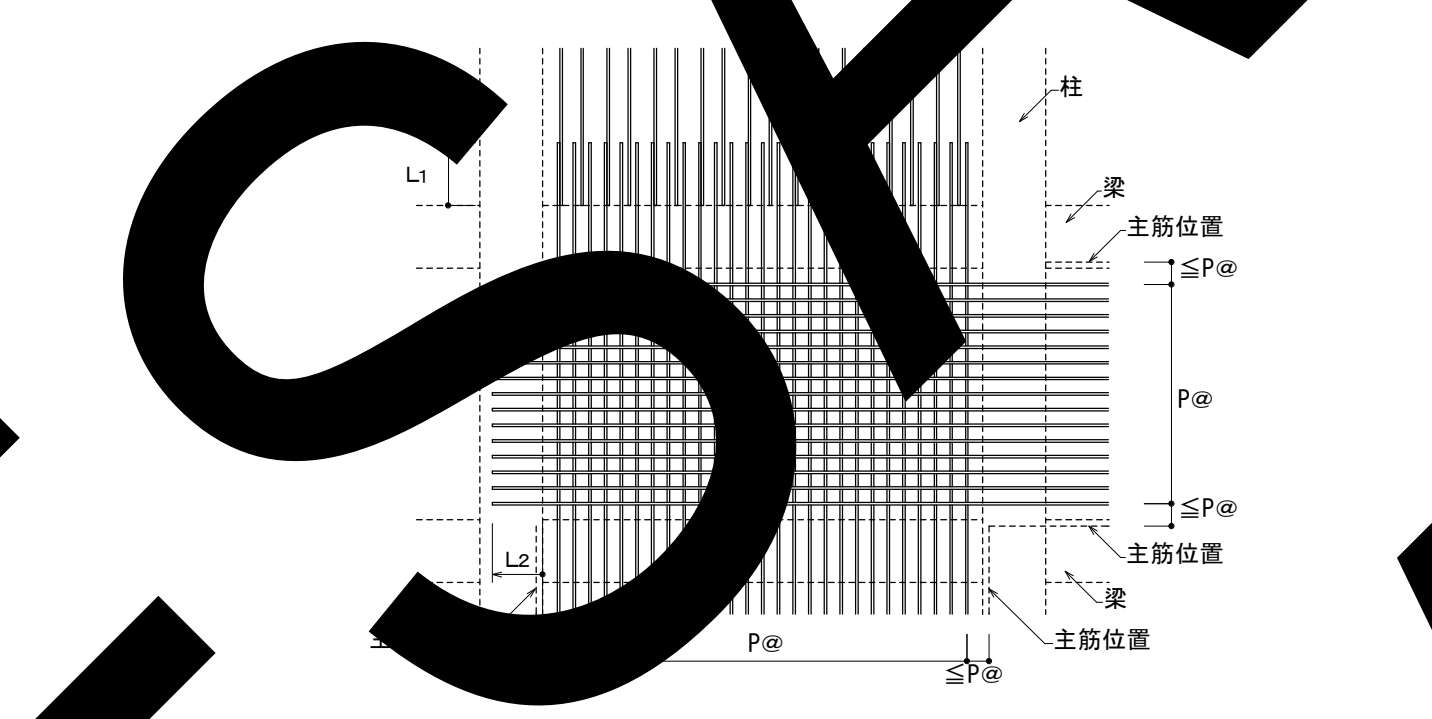
種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W12	D10-200#シングル	
W14	D10-150#シングル	
W18A	D10-200#ダブル	
W18B	D10-200#ダブル	
W20A	D10-200#シングル	
W20B	D10-150#ダブル	

(2) スラブ形階段を受ける壁の配筋は表4.2による。

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種類(表6.1)
KW1	縦筋 D13-200#ダブル 横筋 D10-200#ダブル		KA1
KW2	縦筋 D13-150#ダブル 横筋 D10-200#ダブル		KA2

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。
 (3) 土圧を受ける壁の配筋は、構造図による。

4.2 壁の継手及び定着



- 図中のP@は、特記された壁筋の間隔を示す。
- 壁配筋の重ね継手はL1、定着長さはL2とし、鉄筋の継手位置は柱・梁以外とする。
- 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000#程度とする。

図4.1 壁の配筋

4.3 壁の開口部補強

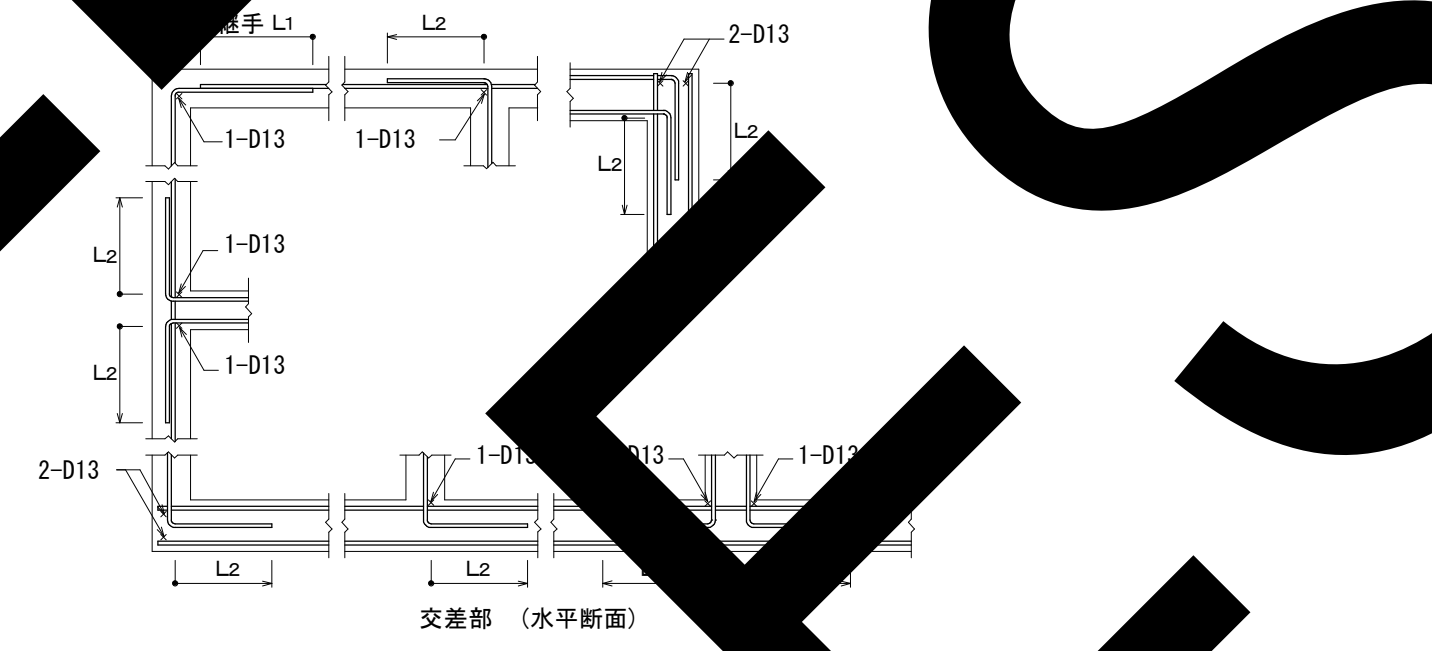


図4.3 壁の開口部補強

4.4 壁の開口部補強

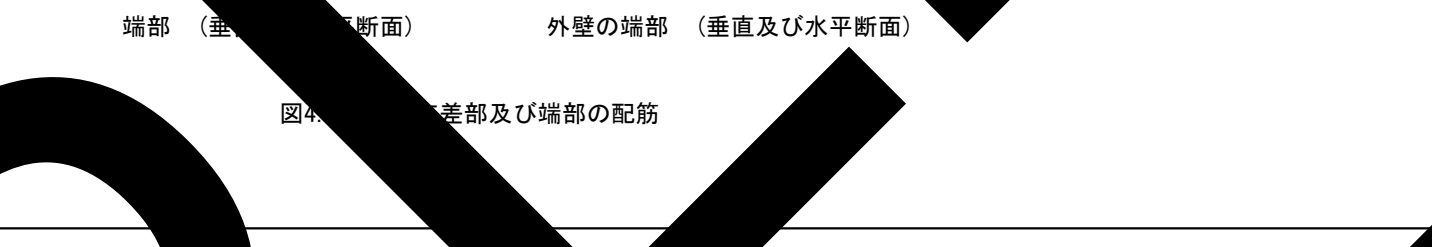


図4.4 壁の開口部補強

4.4 壁の開口部補強

(1) 耐震壁を除く壁開口部の補強筋は、A形は表4.3、B形は表4.4による。

壁の種類	補強筋	
	縦横	斜め
W18	1-D13	2-D13
W20	2-D13	2-D13

壁の種類	補強筋	
	縦横	斜め
W18	1-D13	2-D13
W20	2-D13	2-D13

(注) 開口部の補強筋の定着長さは図4.3による。

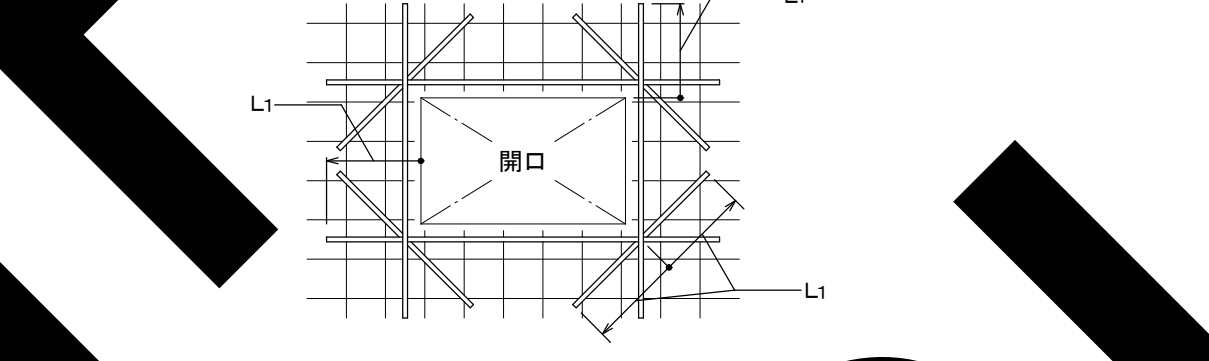


図4.3 壁開口部補強筋の定着長さ

(3) 開口部は柱及び梁に接する部分又は鉄筋を縦や横に曲げることによって補強を省略することができる。コンクリートボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、構造図による。

4.5 パラベット

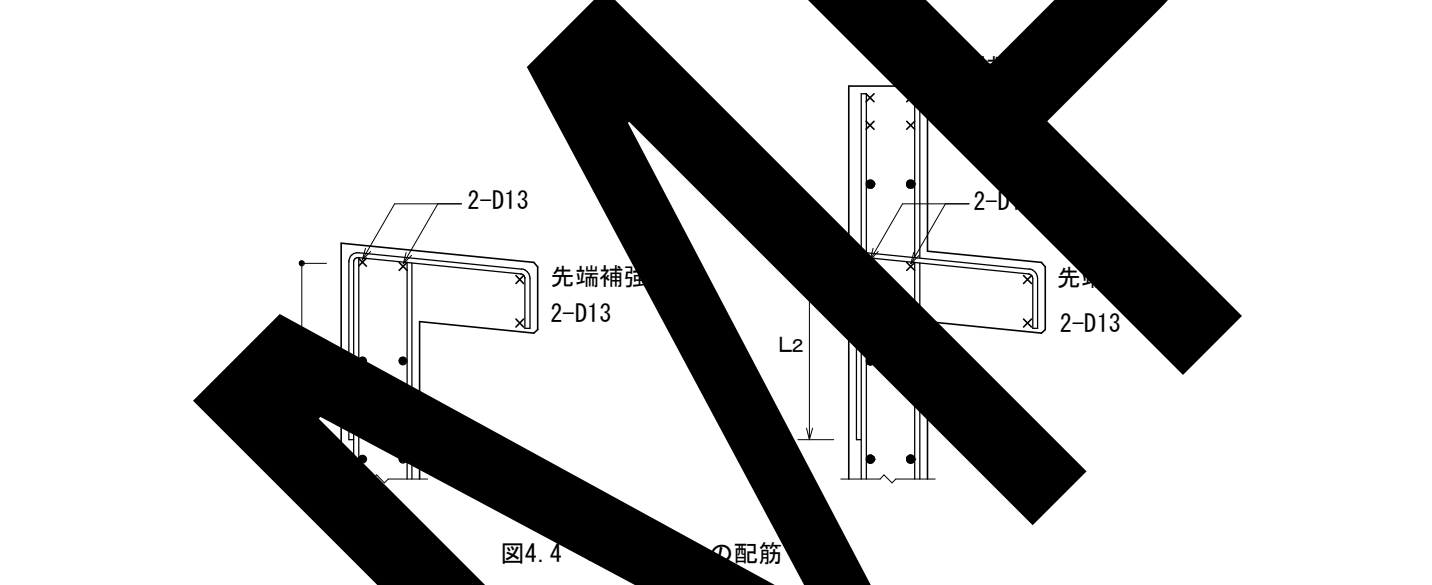


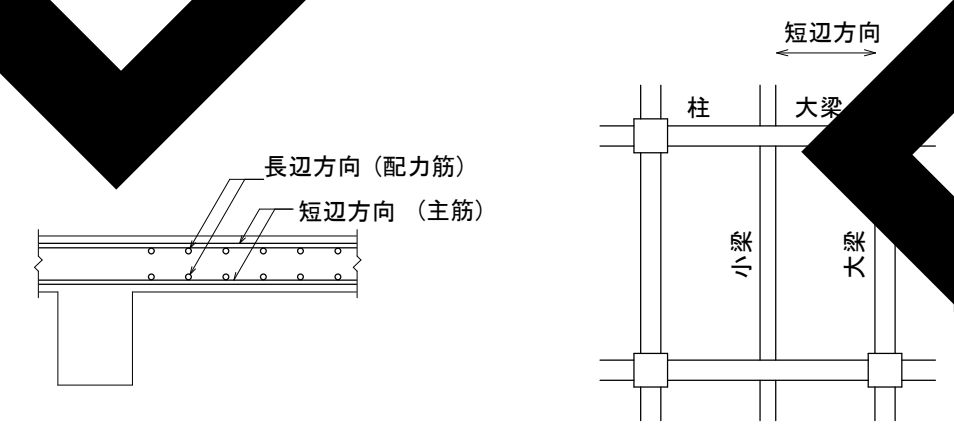
図4.5 パラベットの配筋

5.1 スラブの配筋

スラブの配筋

配筋種類	短辺方向 全域	長辺方向 (配力筋) 全域	配筋種類	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域
S 1	D13-100 ϕ	D13-100 ϕ	S 8	D13-150 ϕ	D10-150 ϕ
S 2	同上	D10-150 ϕ	S 9	同上	D10-200 ϕ
S 3	同上	D10-150 ϕ	S 10	D10、D13-200 ϕ	D10、D13-200 ϕ
S 4	D13-150 ϕ	D13-150 ϕ	S 11	同上	D10-200 ϕ
S 5	同上	D10、D13-150 ϕ	S 12	同上	D10-250 ϕ
S 6	同上	D10-150 ϕ	S 13	D10-200 ϕ	D10-200 ϕ
S 7	D10、D13-150 ϕ	D13-150 ϕ	S 14	同上	D10-250 ϕ

上端筋、下端筋の配筋とする。



1. 配筋の割付けは、中央から行い、端部は定められた間隔以下とする。
2. 鉄筋の重ね継手長さは、 l_1 とする。
3. 土間コンクリート補強筋の配筋及びコンクリート厚さは、構造図による。

図9.1 スラブの配筋

5.2 スラブ筋の定着及び受け筋

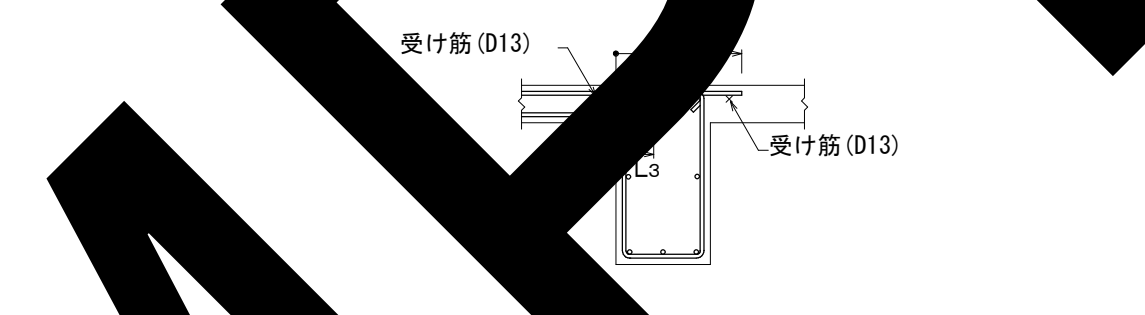


図5.2 スラブ筋の定着及び受け筋(その1)

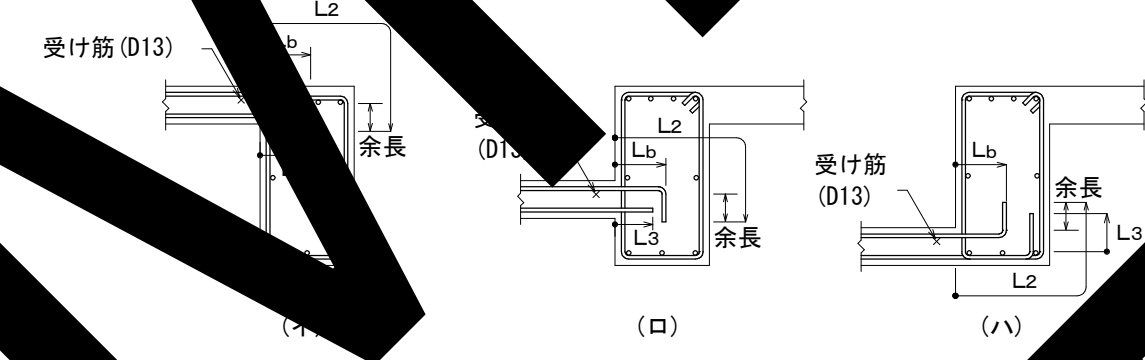


図5.3 スラブ筋の定着及び受け筋(その2)

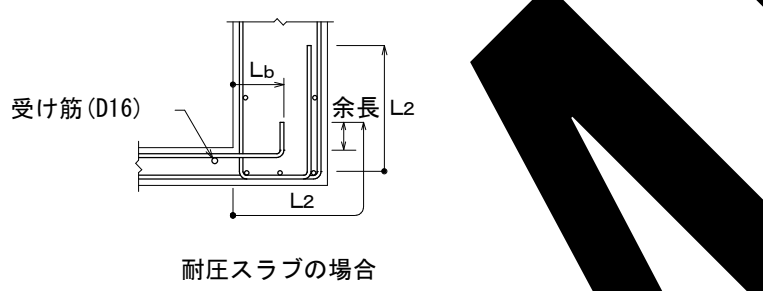


図5.3 スラブ筋の定着及び受け筋(その2)

5.3 片持スラブの配筋

表5.2 CS形配筋

配筋種類	主筋	配筋種類	主筋
CS1	D13-100 ϕ	CS5	D10、D13-200 ϕ
CS2	D13-200 ϕ	CS6	D10-400 ϕ
CS3	D13-150 ϕ	CS7	D10、D13-200 ϕ
CS4	D13-300 ϕ	CS8	D10、D13-200 ϕ
CS9	D10、D13-150 ϕ	CS9	D10、D13-200 ϕ
CS10	D10、D13-200 ϕ	CS10	D10、D13-200 ϕ
CS11	D10、D13-150 ϕ	CS11	D10、D13-200 ϕ
CS12	D10、D13-200 ϕ	CS12	D10、D13-200 ϕ
CS13	D10、D13-150 ϕ	CS13	D10、D13-200 ϕ
CS14	D10、D13-200 ϕ	CS14	D10、D13-200 ϕ

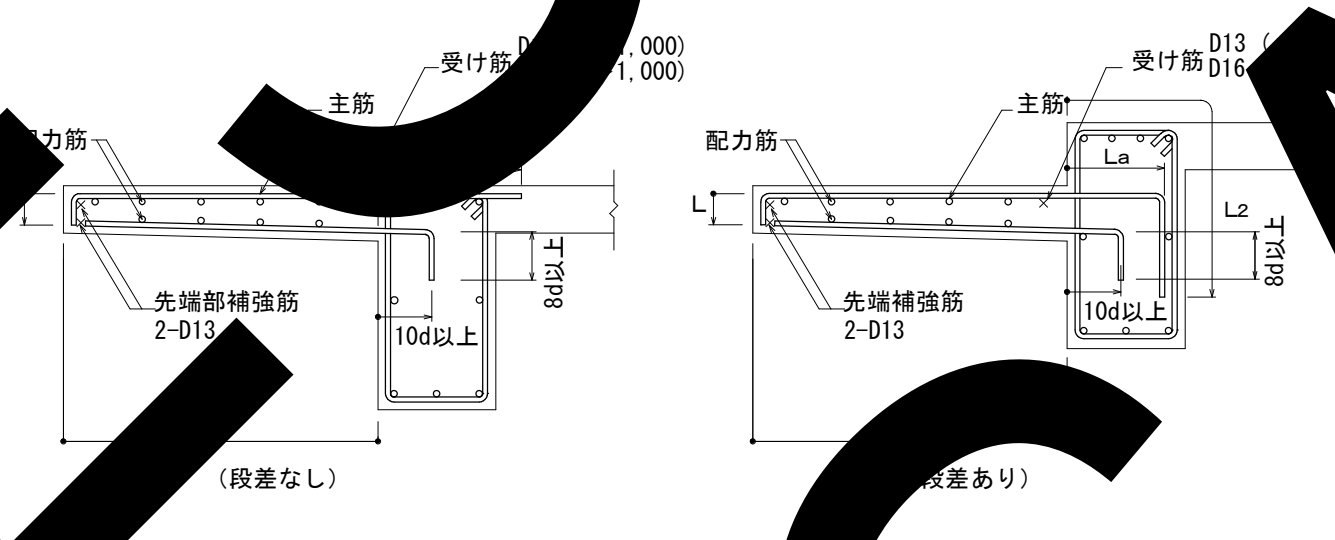


図5.4 片持スラブの配筋 (CS1～CS5)

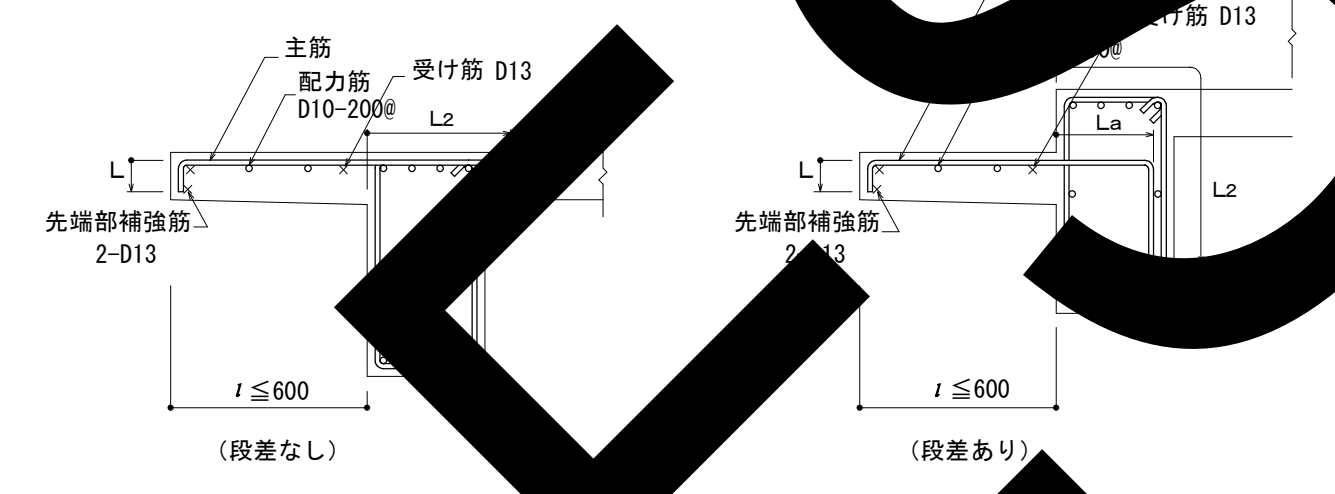


図5.5 片持スラブの配筋 (CS6及びCS7)

1. 先端の折曲げ長さ l_1 は、スラブの厚さ h より大きくなるようにする。
2. スラブに段差のない場合は、主筋を直してスラブに渡してもよい。

5.4 片持スラブの先端に壁が付く場合の配筋

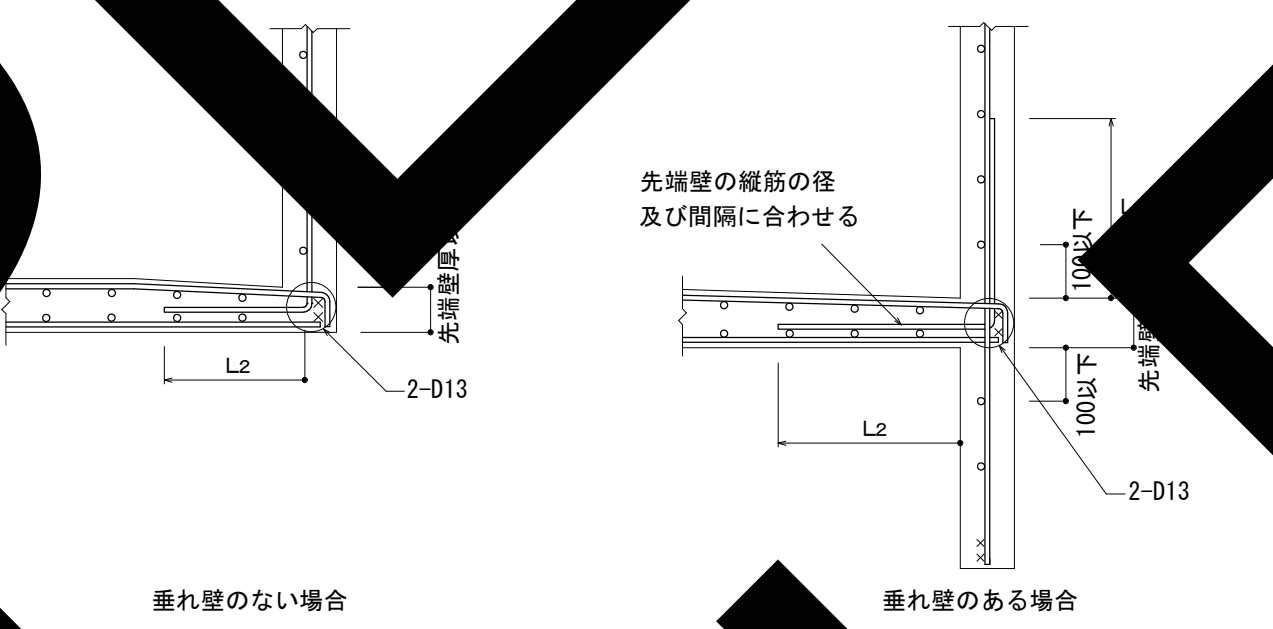


図5.6 先端に壁が付く場合の配筋

5.5 スラブの開孔部の補強

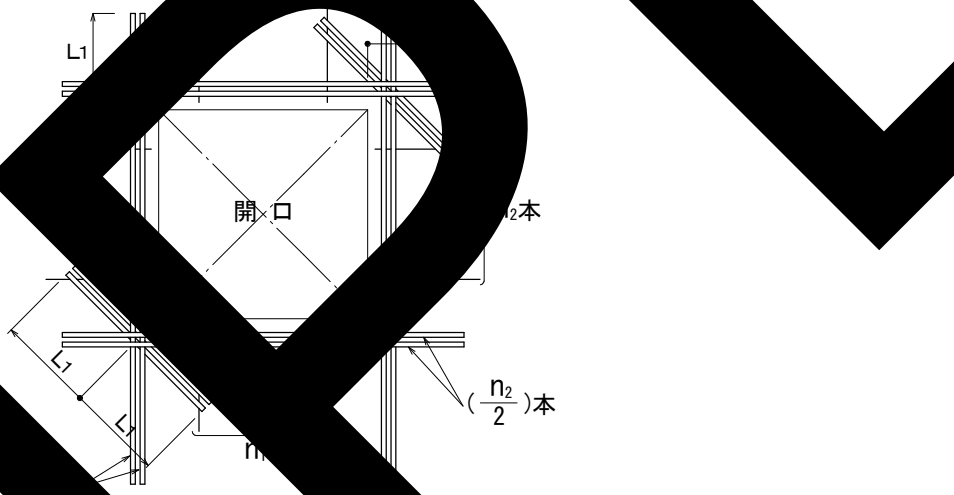


図5.7 スラブの開孔部の補強配筋

1. スラブ開口部によって切られる鉄筋と同等の鉄筋で周囲を補強し、開口部を跨る方向に $2-D13$ ($l=2L_1$) シングルを上下筋の内側に配筋する。
2. スラブ開口部の最大径が両方向とも開口部間隔以下の場合は、開口部を跨る方向に鉄筋を緩やかに曲げることで開口部を避けて配筋できる場合は、開口部の補強筋を省略することができる。開口部の最大径が700mm以下の場合に限る。

5.6 出隅部及び入隅部の補強

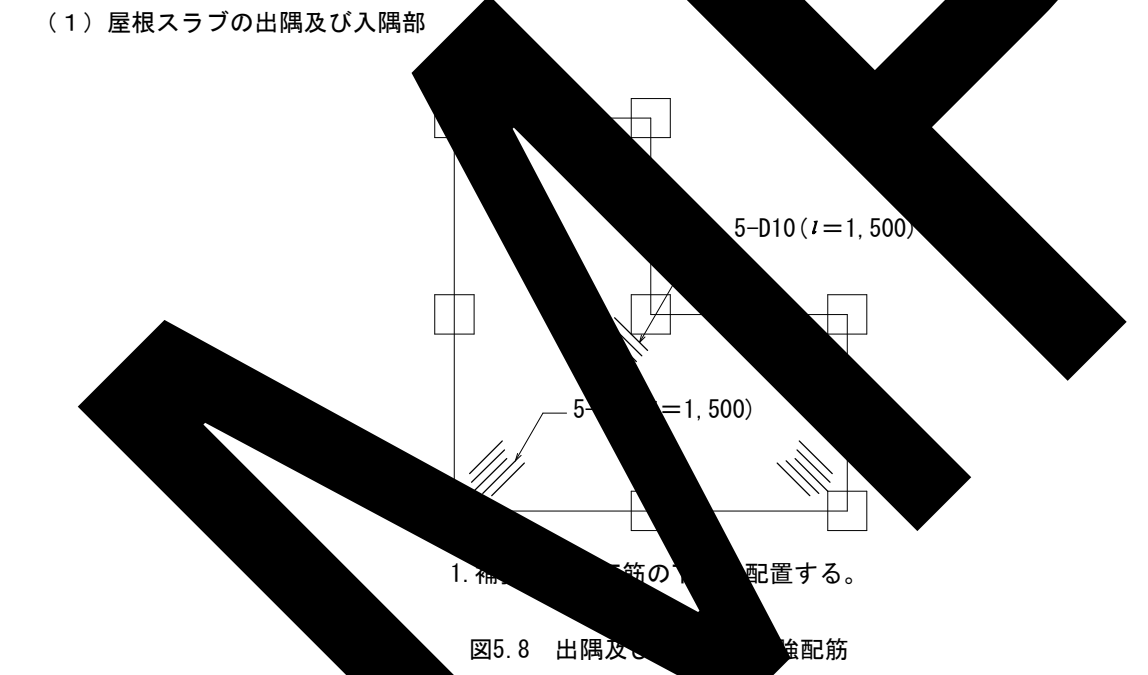


図5.8 出隅部及び入隅部の補強配筋

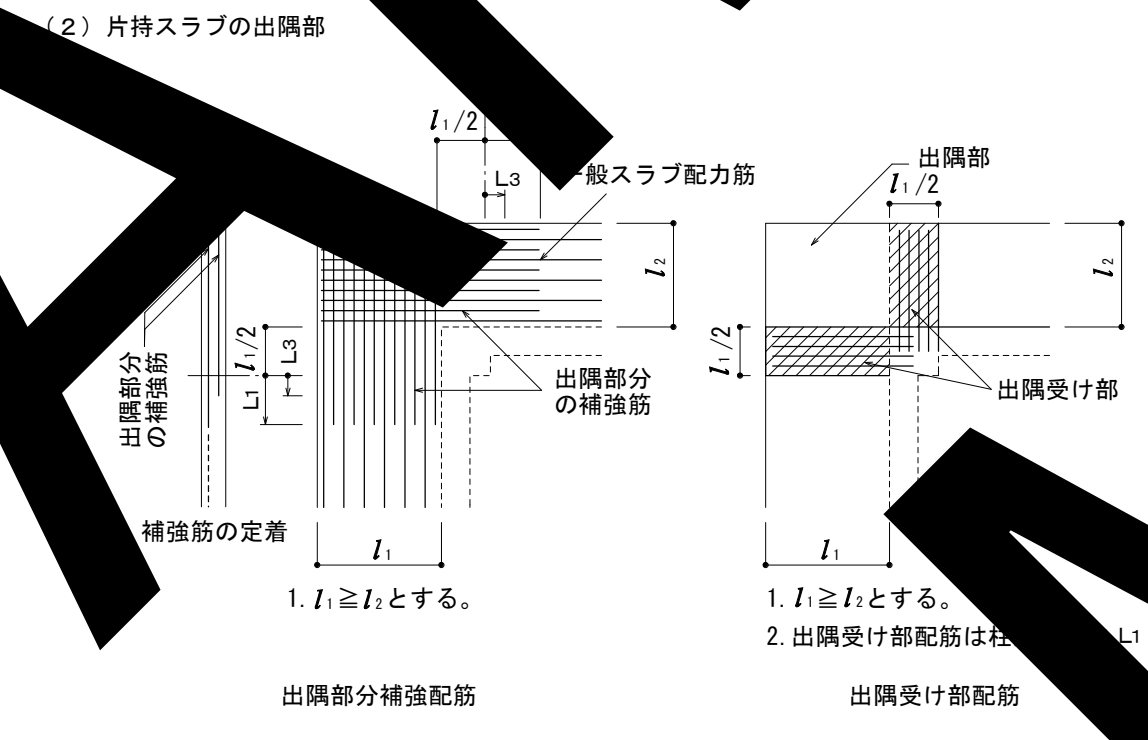


図5.9 片持スラブの隅部の補強配筋

5.7 スラブの打継ぎの補強等

- (1) 土間スラブの打継ぎ補強 (基礎梁とスラブを一体打ちする場合、打継ぎを設けない場合)

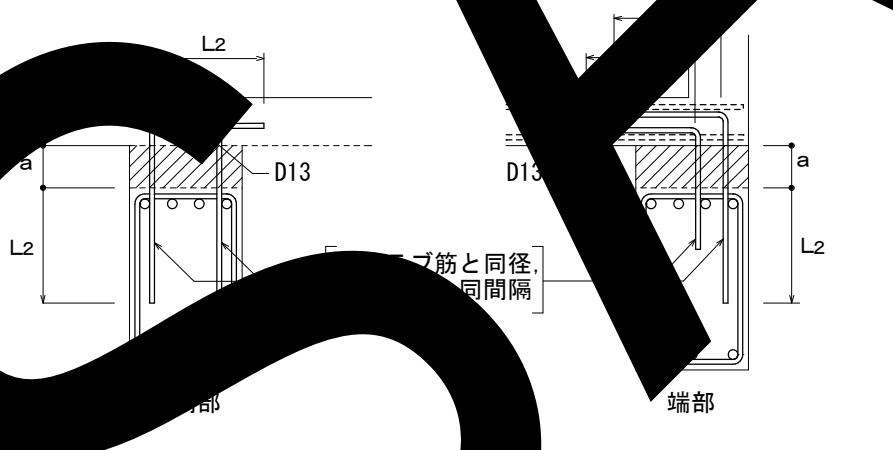


図5.10 スラブの打継ぎ補強配筋

1. 土間コンクリートとは、土に接するスラブのうち、床荷重を直接伝達できるものをいい、それ以外は土間スラブとして、梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。
2. a が300mm以下の場合に限る。

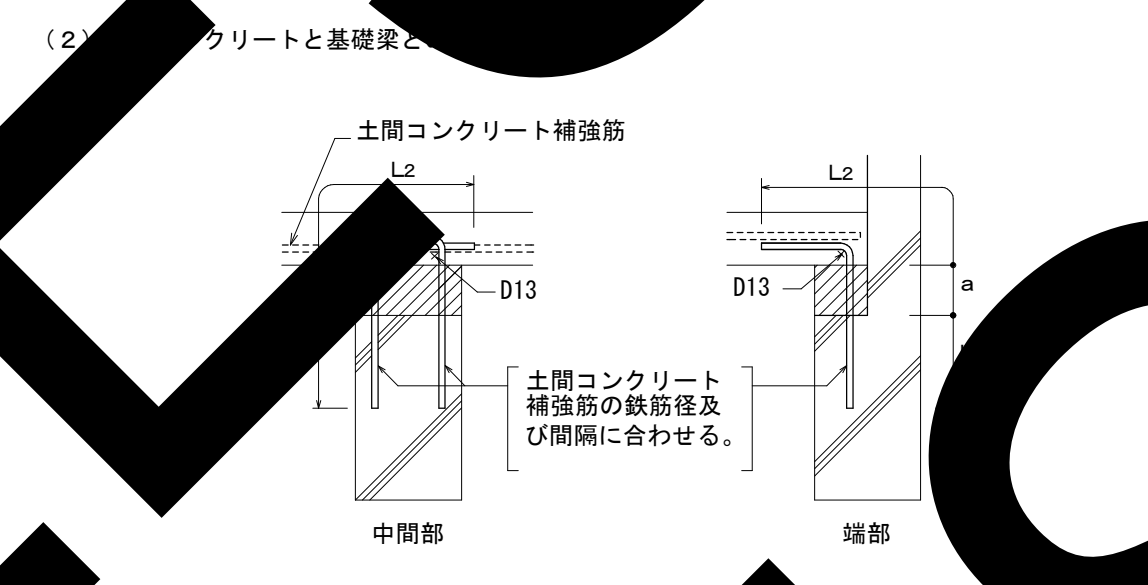
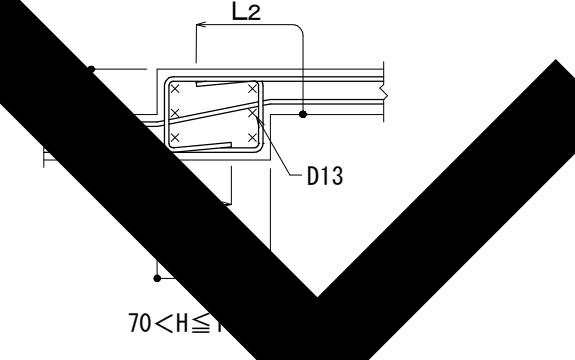
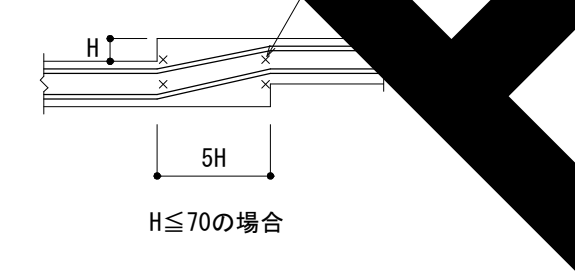


図5.11 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

1. 土間コンクリートとは、土に接するスラブのうち、床荷重を直接伝達できるものをいい、それ以外は土間スラブとして、梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。
2. a が300mm以下の場合に限る。



1. 150mm以下の段差のあるスラブの場合に限る。

図5.12 段差のあるスラブの補強配筋

6.1 片持スラブ形階段の配筋

表6.1 片持スラブ形階段の配筋

配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		

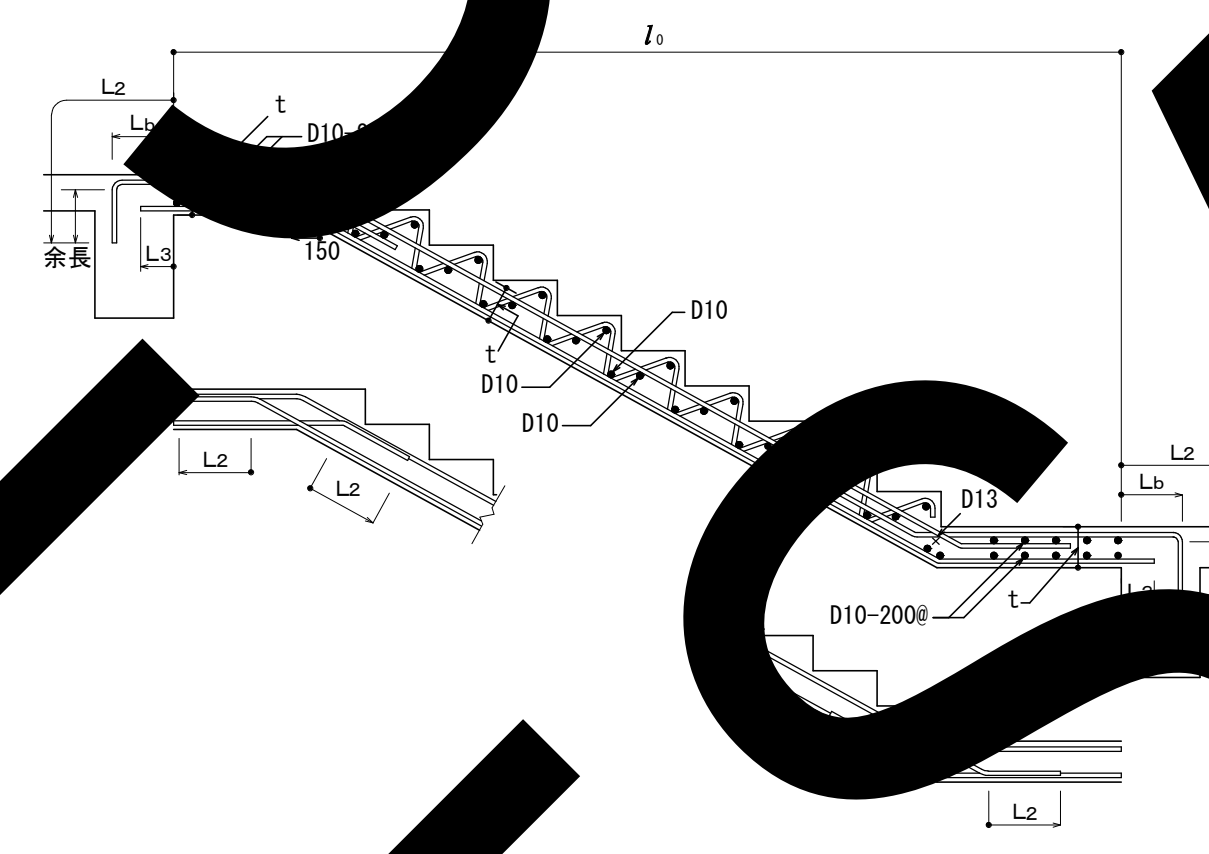
1. 4.1(2)による。
2. 階段の中心線を超えて
3. スラブ配筋は、標準仕様書による。

図6.1 片持スラブ形階段配筋の定着

6.2 二辺固定スラブ形階段の配筋

表6.2 二辺固定スラブ形階段の配筋

配筋種別	KB1	KB2	KB3	KB4	KB7
配筋図					



二辺固定スラブ形階段配筋(その1)

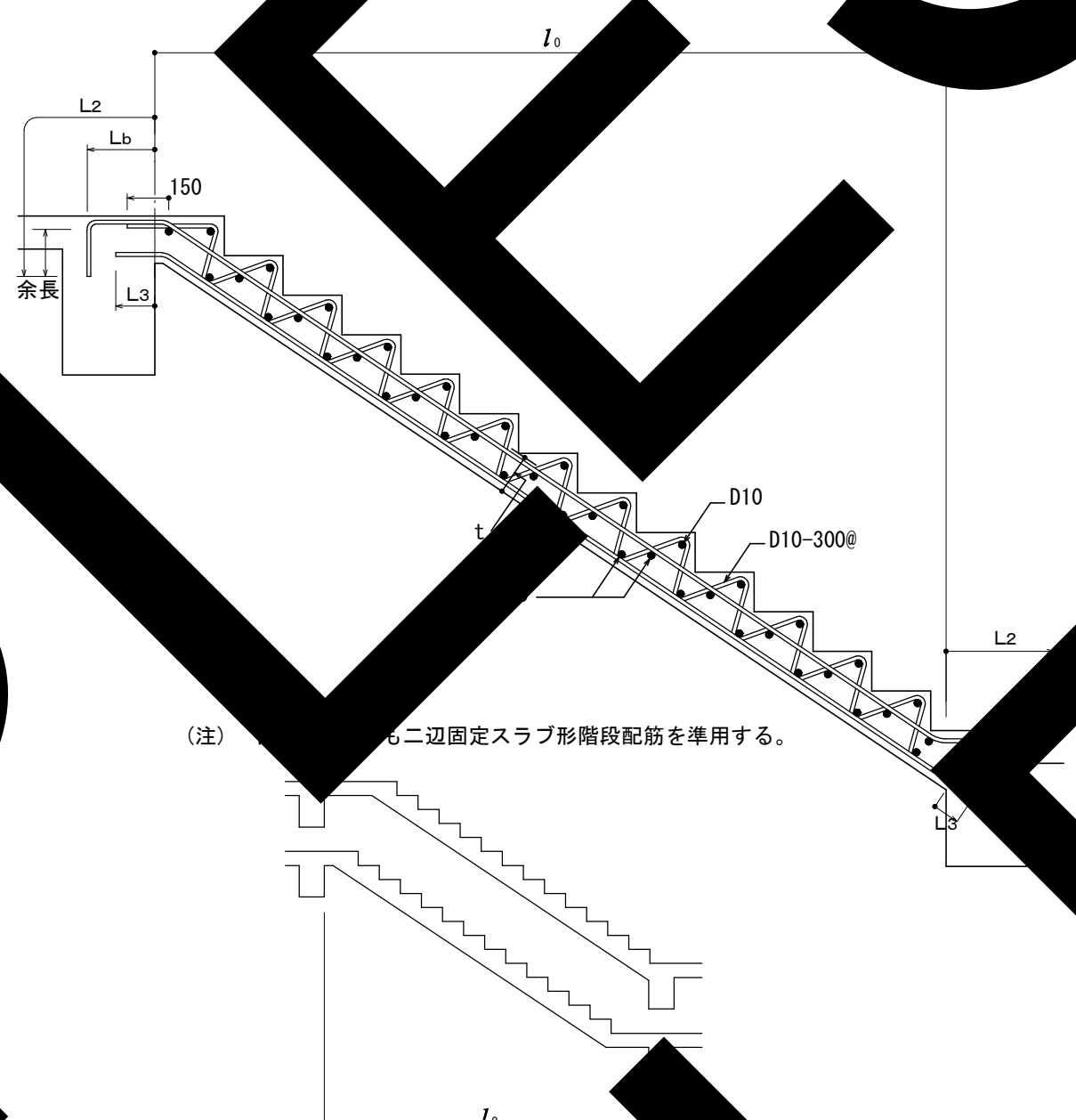
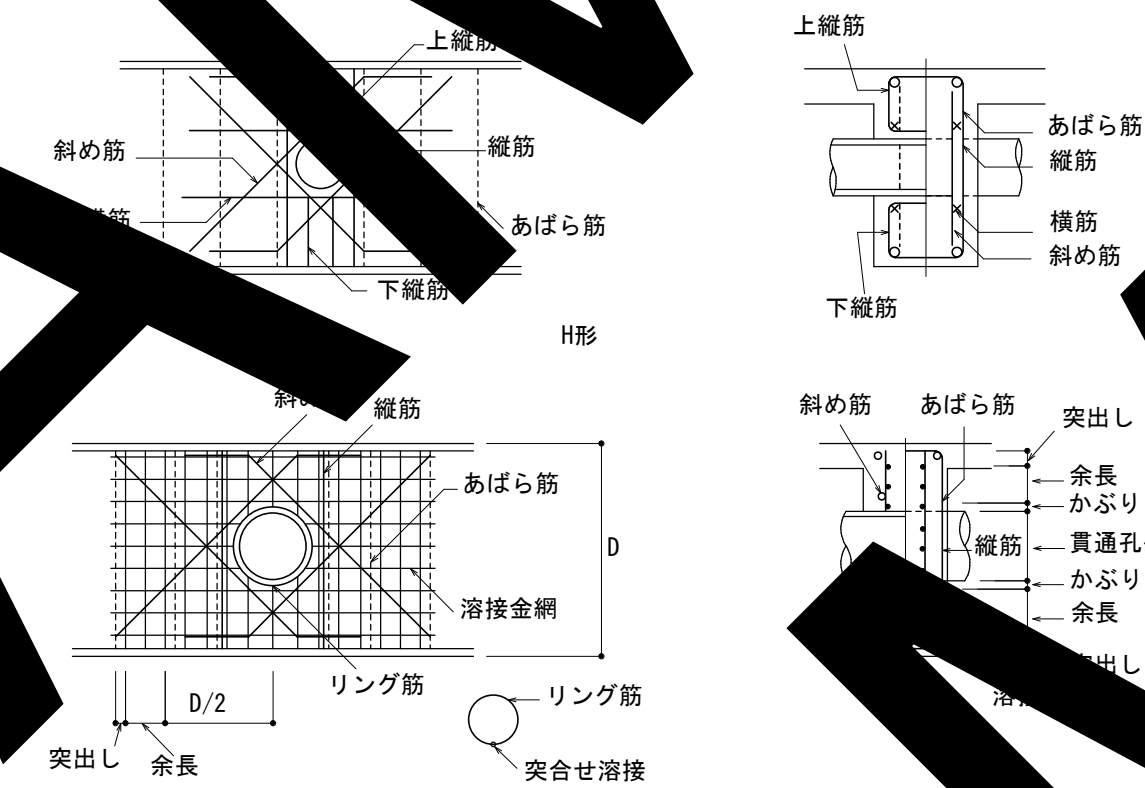


図6.3 二辺固定スラブ形階段配筋(その2)

(注) 二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。

7.1 梁貫通孔の配筋

- 梁貫通孔補強筋の名称等は、図7.1による。
- 孔の径は、梁せいの1/3以下とする。ただし、この場合は孔の中心部は梁せいの1/3以下とする。
- 孔の上下方向の位置は梁せいの1/3以下とし、中央部下端は梁せいの1/3以下とする。
- 孔は、柱面から、原則として、柱径の1/2以下とし、基礎梁及び柱梁との間隔は、柱径の1/2以上とする。
- 孔が並列する場合の中心間隔は、柱径の1/2以上とする。
- 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形状とする。
- 補強筋は、主筋の内側とする。また、規定長さ(図7.2)による。
- 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm以下のものは、梁せいに曲げることにより開口部を避けて配筋できる場合がある。これを省略することができる。
- 補強筋は、格子以上とし、突出しは、格子以上とする。
- 補強筋には、鉄筋1-13φのリング筋を取り付ける。リング筋は、開口部の周囲に4箇所以上溶接金網を溶接する。
- 溶接金網は、開口部のあばら筋の下側に、縦筋では貫通筋とする。
- 他の開口部は、開口部の周囲に、縦筋では貫通筋とする。



梁貫通孔補強筋の名称等

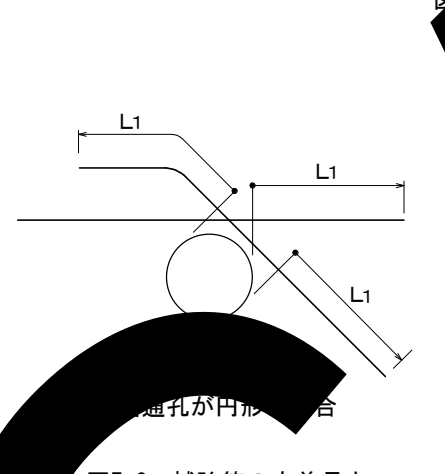


図7.2 補強筋の定着長さ

7.2 梁貫通孔の補強形式

表7.1 H形

配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	下縦筋	配筋図
H1	なし	なし	なし	なし	
H2	2-2-D13	なし	なし	なし	
H3	4-2-D13	なし	なし	なし	
H4	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H5	2-2-D16	なし	なし	なし	
H6	4-2-D19	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H7	4-2-D22	なし	なし	なし	

(注) は、一般部分のあばら筋を示す。

表7.2 M形

配筋種別	縦筋	溶接金網	配筋図
M1	2-2-D13	なし	
M2	4-2-D13	なし	
M3	4-2-D13	2-6φ-100#	
M4	6-2-D13	なし	

(注) は、一般部分のあばら筋を示す。

表7.3 MH形

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金網	配筋図
MH1	なし	なし	なし	
MH2	2-2-D13	なし	なし	
MH3	2-2-D13	なし	なし	
MH4	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
MH5	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
MH6	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
MH7	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	

(注) は、一般部分のあばら筋を示す。

7.3 コンクリートブロック積みの取合い

(1) 控壁の配筋

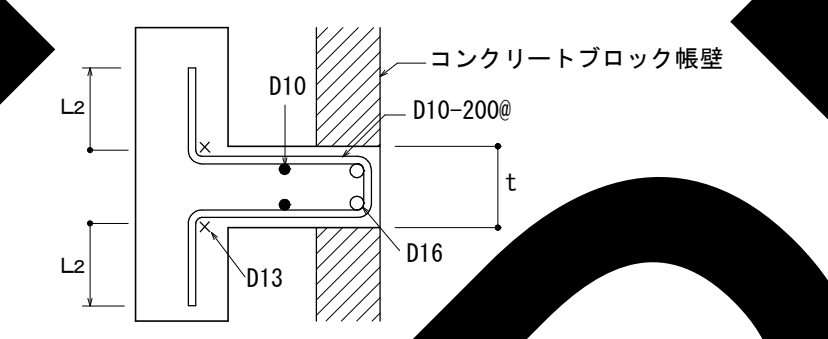


図7.3 控壁の配筋(水平方向)

(2) 横壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強

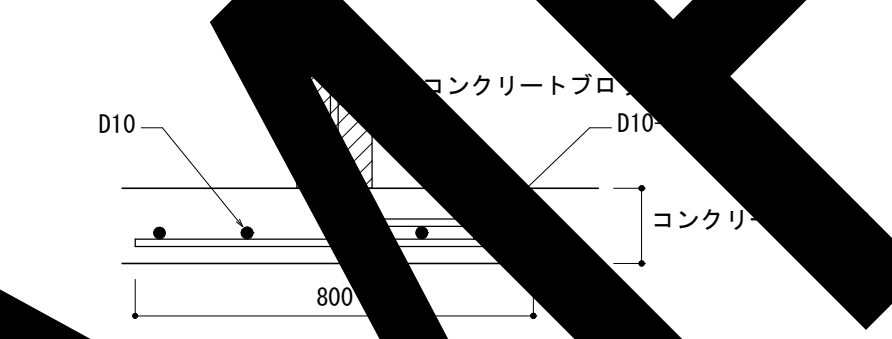


図7.4 壁付き土間コンクリートの補強配筋